

[成果情報名] ベンジルアデニンは主幹形整枝の育苗において側枝を多く発生させる

[要 約] 「ヒリュウ」台「青島温州」主幹形整枝の育苗2年目の苗木において、ベンジルアデニンを100倍希釈で散布することにより、200倍希釈や無散布よりも側枝を多く誘発できる。

[キーワード] 青島温州、ヒリュウ台、主幹形、ベンジルアデニン

[担 当] 静岡農林技研・果樹研セ・栽培育種科

[連絡先] 電話 054-334-4853、電子メール [kaju-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp](mailto:kaju-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp)

[区 分] 果樹

[分 類] 技術・参考

---

#### [背景・ねらい]

カンキツ経営規模拡大に向けて作業の省力化、軽労化を促進するために、「ヒリュウ」台「青島温州」を主幹形整枝に仕立てる栽培方法が確立されている。

「ヒリュウ」台「青島温州」を主幹形整枝に仕立てるためには、育苗において十分な側枝を確保する必要がある。そこで、ベンジルアデニン（商品名「ビーエー液剤」6-Benzylaminopurine3.0%）の濃度の違いが、育苗2年目の苗木における側枝発生に与える影響を検討する。

#### [成果の内容・特徴]

- 1 ベンジルアデニンを100倍で散布すると、新梢が多く発生し、その8割が有葉花となる。発生した新梢の長さや葉数は200倍や無散布の場合と差がない（表1、2）。
- 2 ベンジルアデニンを200倍で散布すると、無散布の場合と明らかな差がない（表1、2）。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 育苗は無加温ハウスで行う。1年目に伸ばした芽を2年目の春に180cmを目安に摘心し、ベンジルアデニンを散布する。新梢が緑化した後にほ場に定植する（図1）。
- 2 有葉花および直花は全摘蕾する。
- 3 ベンジルアデニンは、1樹当たり50ミリリットル程度を、主幹全体が十分に濡れるように散布する。

[具体的データ]

表1 ベンジルアデニンの濃度の違いが着花に与える影響

試験区	新梢数 (A)	直花数	有葉花数	発育枝数 (B)	発育枝率 <sup>Z</sup> (%)
100倍	40.8a <sup>Y</sup>	0.0	32.4a	8.2	20.6b
200倍	28.2b	0.0	13.6b	14.6	51.8a
無処理	25.6b	0.4	13.8b	11.8	46.1a
有意性 <sup>X</sup>	**	n.s	*	n.s	**

<sup>Z</sup>(B)/(A)×100 アークサイン変換後検定

<sup>Y</sup>Tukey法(5%水準) <sup>X</sup>\*\*は1%で、\*は5%で有意差あり、n.sは有意差なし

表2 ベンジルアデニンの濃度の違いが新梢の発生と新梢長に与える影響

試験区	新葉数	旧葉数	発芽率 <sup>Z</sup> (%)	新梢長 (cm)	新梢1本当たり 葉数
100倍	247.0	66.4	58.7a <sup>Y</sup>	20.7	6.1
200倍	236.0	67.2	40.8b	24.5	8.4
無処理	196.2	66.6	36.3b	25.6	7.7
有意性 <sup>X</sup>	n.s	n.s	**	n.s	n.s

<sup>Z</sup>発芽率=新梢数/旧葉数×100(アークサイン変換後検定)

<sup>Y</sup>Tukey法(5%水準) <sup>X</sup>\*\*は1%で有意差あり、n.sは有意差なし

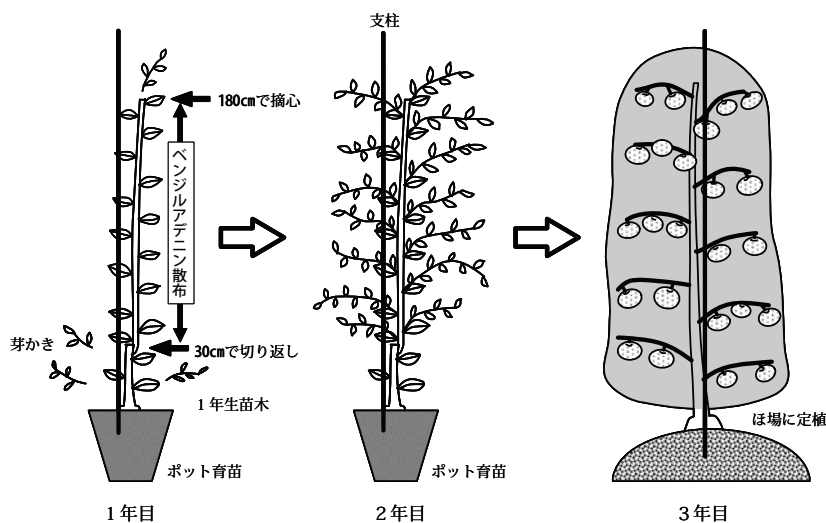


図1 主幹形の仕立て方

[その他]

研究課題名：ビジネス経営の実現に必要なカンキツ栽培システムの開発

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：後藤浩文